

大学生の視点から見た「説得力のあるアーギュメント」とは Exploring “Persuasive Argument” from Undergraduates’ Views

富田 英司[†]
Eiji Tomida

[†]愛媛大学
Ehime University
tomida@ed.ehime-u.ac.jp

Abstract

This article compared college student’s intention to make an argument effective and their actual writing performance. Participants were 96 Japanese undergraduates. They were asked to write two argumentative essays and answer what they had intended to make their writings persuasive. As a result, my-side bias was identified among them. Some participants have intentions congruent with performances; others have intentions discord from their performances. Gaps between intentions and performances would indicate what part of argumentation skills should be taught explicitly.

Keywords — Academic Writing, Argumentation, College Students, My-side Bias

1. はじめに

作文能力を測定する観点の1つとして近年有力視されているものの1つに「アーギュメント」の構成力がある[1]。大学生のアーギュメント構成力に関しては、マイサイド・バイアスが広くみられることが報告されている。マイサイド・バイアス[2]とは、自分の立場を支持する論拠やデータのみに関及し、自分の立場に反対する論拠やデータには言及しない傾向である。反論の想定は創造的な反省的思考を促進する原動力となる。人は経験した個人間対話の過程を内化し、その内化された対話によって思考を進展させることができる[3]。文中に含まれる想定された反論は、その内化された他者の痕跡が現れたものと考えられる。アカデミック・ライティングのスキルを身につけるには、マイサイド・バイアスを乗り越え、自らの論証過程の中に自分とは相容れない他者の声を導き入れ、それと真摯に対話することが必須である。

本研究の目的は、大学生のアーギュメント構成力やその育成に関する知見を得ることである。具

体的には(1)本邦の大学生においてマイサイド・バイアスがどの程度見られるか、(2)アーギュメントのスキルはその表現上の意図とどの程度一致しているか、の2点を明らかにしようとした。

2. 方法

対象 福岡県内の私立4年制大学の法学部および商学部¹に在籍する96名(男51名、女45名)。実施は2006年11月であった。課題はA3用紙に4つの質問を配したものであり、授業中に隣と相談せずに回答するよう求めた。回答は約20分間。

課題 質問1は「あなたは喫煙することについて一般的に賛成ですか反対ですか。まずあなたの立場を書いてから、なぜそう考えるか書いてください。その際、あなたと考えが異なる人を納得させるつもりで、あなたなりに説得力のある説明をしてください」というものであった。質問2も上記と同様で、テーマを死刑制度の是非とした。質問3・4は、質問1・2で説得力を高めるためにどのような工夫を行ったかを問うものであった。本論文では質問1と3のみについて報告する。

3. 結果と考察

回答は全て書き起こされ、筆者および第3者評定者によって独立してコード化された。質問1については表1のカテゴリを用いて、質問3については表2のカテゴリを用いてコード化を行った。

表1を用いて、作文の中に含まれるアーギュメントの質を評価したところ、全96ケース中、「理由付け」は93(97%)、「データ」は11(11%)、「体験談」は18(19%)、「演繹」は4(4%)、「反対意見の想定」は24(25%)、「反対意見への再反論」

は 24 (25%), 「主張範囲の限定」は 19 (20%) のケースで確認された。つまり, 質を問わなければ, ほとんどが理由付けを行っていたと言える。他方, 反対意見を想定した者は全体の 1/4 に過ぎなかった。このことから本研究の対象者においてもマイサイド・バイアスが確認されたと言える。

表 1 アーギュメントの質を評価するカテゴリ

カテゴリ	説明
理由付け	書いた本人なりの理由が含まれる。
理由の根拠	
データ	何らかの研究結果や統計が示されている。本や新聞の引用も含む。
体験談	自分や周囲の人々の体験談や経験に基づいた話が示されている。
演繹	一般的な原理や原則を具体的な個別事例に当てはめて論証している。
反論	
反対意見	自分と異なる意見や反対意見の想定。
反対意見の理由	自分とは異なる意見や反対意見に理由がある。
反対意見の理由の根拠	自分とは異なる意見や反対意見の理由に根拠がある。
反対意見への再反論	反対意見に再反論している。
主張範囲の限定	自分の主張が当てはまる範囲や限界点が示されている。

次に表 2 を用いて, 作文にどのような工夫を意図したか頻度を算出した。頻度が 6 以上だったカテゴリを示すと, 「反論を批判」は 36 (38%), 「両面的な議論」は 21 (22%), 「モラル・周囲の声」は 18 (19%), 「具体性」は 8 (8%), 「理由付け」は 8 (8%), 「体験」は 7 (7%), 「譲歩」は 7 (7%), 「引用」は 6 (6%) ケースが該当した。

以上から, 反論に関連した操作の重要性は最も多くの者が認識していたことが分かったが, 実際の遂行にはどの程度反映されているだろうか。これを明らかにするために, 実際の遂行と意図された工夫との関連性を分析した。理由付けを意図した 8 名は全員が実際に理由付けしていると判断された。体験談を含める点で工夫した 7 名中, 5 名は実際にそれが出来ていると判断された。引用することを工夫に挙げた 6 名のうち, 5 名は実際にデータを引用していた。以上は意図と遂行がほぼ一致していたカテゴリである。

他方, 両面的な議論を心がけたと答えた 21 名中, 実際に反対意見を想定できたのは 10 名に過ぎなかった。また, 反対の立場を批判した点を工

夫として答えた 38 名のうち, 12 名のみがその前提となる反対意見を想定できていた。同様に, 反論を批判したと答えた 36 名のうち, 12 名のみが反対意見への再反論を行っていると判断された。

表 2 工夫した点を分類するカテゴリ (抜粋)

カテゴリ	説明
理由付け	理由をつける。
理由 体験	自分や身近な人の体験談を含める。
理由 引用	理由を支持する事実や専門家の引用。
ルールや原理	ルールや原理を引き合いに出す。
構造 両面的な議論	自分とは反対の意見にも触れる。
反論を批判	論争相手の主張の欠点に訴える。
譲歩	論争相手に譲歩する。
モラル・周囲の声	論争相手の主張がモラルに反すことを強調する。周囲の期待とのズレを示す。

以上の分析から, 作文において自分の主張に理由をつけること, 体験談や逸話を含めること, データを引用することは, 学生が工夫をしようとする意図と実際の遂行が一致していることが分かった。他方, 反論を想定したり, 再反論したりすることの重要性は学生に比較的広く認識されているものの, 実際にそれらを適切に遂行できる者は半数以下であった。この結果から, 反論の想定や再反論の仕方について適切な教授が求められていることが示唆される。

今後は意図と遂行が一致しない事例を詳細に分析し, どのような理由でその不一致が起こっているのか明らかにすることが重要であろう。

参考文献

- [1] 鈴木宏昭・館野泰一・杉谷祐美子・長田尚子・小田光宏 (2007) Toulmin モデルに準拠したレポートライティングのための協調学習環境. 京都大学高等教育研究, 13, 13 - 24.
- [2] Perkins, D. N., Farady, M., & Bushey, B. (1991). Everyday reasoning and the roots of intelligence. In J. F. Voss, D. N. Perkins, & J. W. Segal (Eds), *Informal reasoning and education* (pp.83-106). Hillsdale: Erlbaum.
- [3] 富田英司・丸野俊一 (2004) 思考としてのアーギュメント研究の現在 心理学評論 47 (2), 187-209.